

「経世済民」と“Economy”

～異義語の同義化について～

シンキング・バース

日本語研究班

「経済」という概念と “Economy”という概念

日 本語の「経済」は、欧米語の翻訳語となる以前から、中国語由来の漢語として使われていました。一般論では、「経世済民（世を治めて、民の苦しみを救う）」という連語を簡略化した用語とされています。日本では、江戸時代中頃に早期の用例があり、「天下国家の経営術」のようなニュアンスで使われたと言われます。その後、江戸時代末期に英語の“economy”の翻訳語として使用され始めました。その使用法が、日本語として浸透して行っただけでなく、中国語にも逆波及したとされています。

日本語の「経済」は、中国語由来の意味と英語由来の意味（「節約／儉約」を含む）で使用するのが一般的です。日本語で言う「経済」と英語で言う“economy”に相当する欧米語概念とには、一定のズレがあります。ここでは、「資本」という概念が成立する前提となった「経済(economy)」について、歴史学的な考察をします。まず、日欧両語の形成過程を検証し、両概念のズレについて考えます。

●「経世済民」の用語史

用

語としての「経済」の形成過程は、中国の歴史学者・馮天瑜（フエン ティアンユー 1942 - 2023）氏が、論考「中国語、日本語、西洋語間の相互伝播と翻訳のプロセスにおける「経済」という概念の変遷（日本語訳：呉咏梅氏）」で、古代中国の用例から説き起こす考察を試みています。

それによると、動詞としての「経」は「治」と同じ意味で、「経世」の初出は、莊子による「春秋経世（春秋の世紀）」だったとしています。その「経世」を、「世を治める／世を救済する」と解釈したのは儒者たちで、その儒教的解釈が、後世に伝わりました。一方、「済」は「渡」と解釈でき、「川を渡る」という意味から「救助／救済」の語彙が派生したとしています。その用例として、『尚書（書経）』にある「以済兆民（万民を救うを以て）」という句を挙げています。いずれも、春秋戦国時代（BC770～BC221）のものです。その「経世」「済民」の両語は、連語化して「経世済民」「経世済俗」「経邦済世」などになり、「経世済民」は、隋唐時代に流行語化したと馮氏は述べています。

その「経世済民」を略した熟語が、

「経済」です。中国での初見は、一般的には西晋（265～316）の時代とされていますが、馮氏は、唐代から使用頻度が増えたとしています。引用した「嘲魯儒」と題する李白（701 - 62）の詩には、「問以経済策、茫如墜煙霧（経済の策を以って問うに、煙霧に墜つるが如く茫漠なり）」とあります。「経済」の基本的な意味は、「経世済民」です。以後、宋代、明代、清代の事例を挙げながら、「経済」の意味を検証していますが、古典的な意味を踏襲したまま、ほぼ「国策」に近い意味で使われたとしています。その使用法は、清末まで変わらなかったというのが馮氏の見解です。

馮氏は、日本での「経済」の用例についても言及しています。馮氏によると、江戸時代中期の儒学者・太宰春台（1680 - 1747）が著した『経済録』が、早い段階での「経済」の使用例です。同書で春台は、「凡そ天下国家を治むるを経済と云ふ」と述べ、中国の為政者たちが古代から残して来た言辭は、「皆、此の経済の一事の為め也」としました。同時期以降の日本では、蘭学者の青木昆陽（1698 - 1769）の『経済纂要』、儒学者の海保青陵（1755 - 1817）の『経済談』、中井竹山（1730 - 1804）の『経済要語』、古賀精里（1750 - 1817）の『経済文録』、正司考祺（1793 - 1857）の『経済問答秘録』などが編まれました。佐藤信淵（1769 - 1851）は『経済問答』の中で、「経済とは、国土を経営し、万貨を豊饒にして人民を済救するの道なり」と述べています。これらの「経済」は、中国伝来の「政治によって民を救う」を指しました。

江戸時代後期は、いわゆる幕藩体制の諸矛盾から、政治改革の風潮が中央と地方で現れた時代です。政策論的富国論のような「経済（経国済民／経邦済民）」に関する言説が、日本各地で唱えられました。米沢の上杉治憲（鷹山 1751 - 1822）による藩政改革も、その一例でしょう。ただし、日本の用語史的には、『平家物語』にまで遡る「経営」という漢語があります。「多日の経営をむなしふして片時の灰燼となりはてぬ」という用例で、平家の没落を描いています。

「経済」は、「経営」を代替した側面があり、「済（救う）」を加味した用語だった可能性があります。

●“economy”の翻訳をめぐる

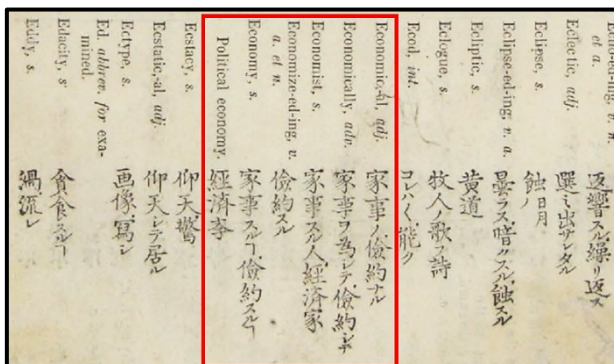
英 語の“economy”を「経済」と翻訳としたのは、幕末から明治時代初期にかけての日本の知識人たちでした。馮氏によると、“economy”を「経済」と訳出した最初の書物は、1862年（文久2年）に出版された『英和对訳袖珍辞典』です。この辞書は、徳川幕府でオランダ通詞を務めていた堀達之助（1823 - 94）が、西周（1829 - 97）らの協力で編纂した日本初の英和辞典とされています。

立教大学図書館蔵のデジタルライブラリ版が公開されていて、そこには、“Economic-al／Economically／Economist／Economize-ed-ing／Economy（Political economy）”の5語＋1熟語が掲載されています。そのうち「経済」の訳語を用いているのは、“Economist”の「家事スル人／経済家」と“Political economy”の「経

「経済（ガク）」です。“Economy”単独の訳語は、「家事スル／節約スル」としています。その他の形容詞や動詞などの訳語も、「家事／節約」を基本にしています。なお、馮氏の論考では、“Economist”を「経済学者」と訳したとされていますが、その訳語は確認できません。国立国会図書館蔵の慶應3年（1867年）改訂増補版でも同様です。

英語の“economy”を「経済」と翻訳することには、当時の日本の知識人たちの間で、躊躇があったようです。“economy”と「経世済民」とは、同義ではないという認識からでした。馮氏は、そうした中で「経済」の今日的な意味に大きく影響した書物として、神田孝平（1830 - 98）の『経済小學』と福沢諭吉（1834 - 1901）の『経済論』を挙げています。

『経済小學』は、イギリスの経済学教師・ウィリアム・エリス（William Ellis 1800 - 81）が1846年に著した“Outlines of Social Economy”のオランダ語版からの邦訳本です。1867年（明治元年）に出版されました。その序で神田は、西洋の学校では一般的に「教科／政科／理科／医科／文科」の5科目があるとしました。

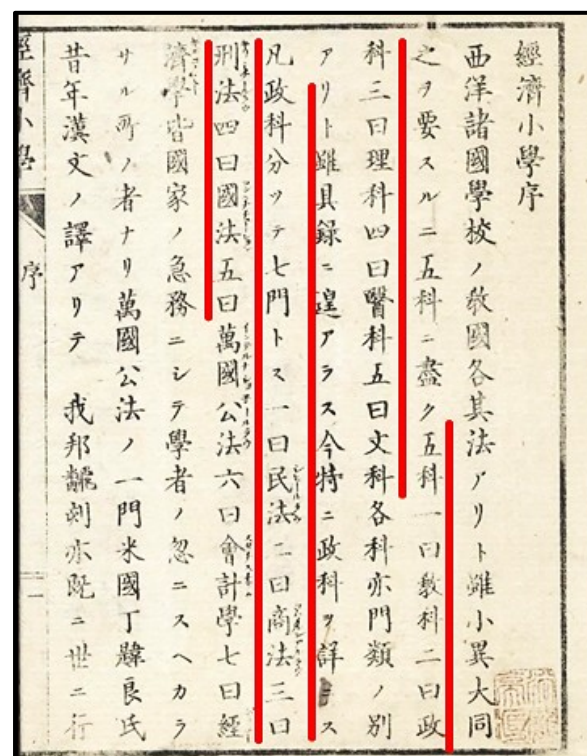


【出典】堀達之助編著『英和対訳袖珍辞書』（立教大学図書館デジタルライブラリ）

※ □—は筆者による

そのうち政科には、「民法／商法／刑法／国法／万国公法／会計学／経済学」の7分野があるとし、国家にとって全分野の学習が必要だが、訳本がない「経済学」について、オランダ語版から訳出したと書いています。「政科」とは、いわば政治学のことで、法学と経済学からなることとなります。ただ、会計学と経済学とは別分野としたのです。“Social Economy”という用語は、オランダ語で“Staatshuishoudkunde（国家財政学）”と訳され、それを「経済」と邦訳したようです。直訳で「社会的経済」となる概念には意味不明な要素があり、その“Social（社会的）”の訳語を“Staat（国／邦）”としたことにも問題があります。それを含む単語を「経済」と訳したのです。

一方、『経済論』は、スコットランドのジョン・ヒル・バートン（John



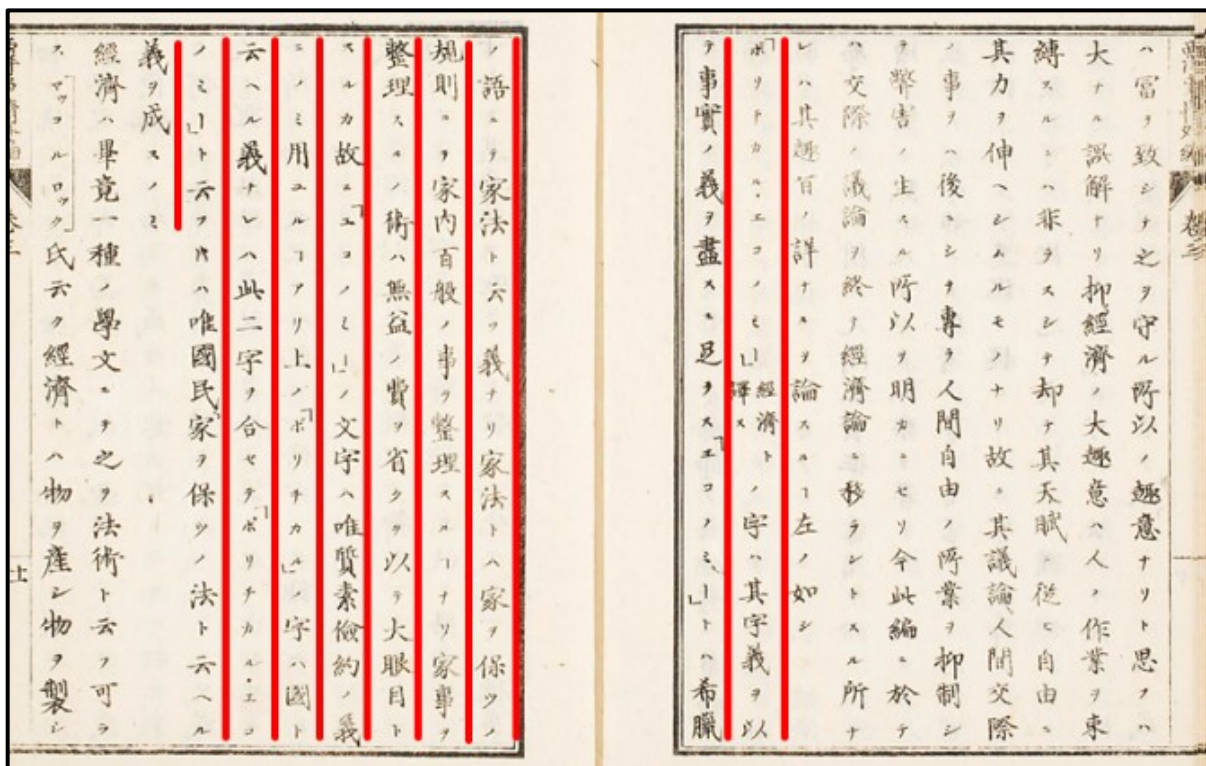
【出典】『経済小学』（小泉吉永所蔵）
国書データベース

<https://doi.org/10.20730/100299775>

Hill Burton 1809 - 81) が 1852 年に出版した “Political Economy : for Use in Schools, and for Private Instruction” を邦訳したもので、後に『西洋事情 外編』に収められました。ここで福沢が「経済」と訳したのは、“Political Economy (ポリチカル・エコノミー)” です。そして、「エコノミー」は、ギリシャ語由来の「家法」の意味だとし、「家ヲ保ツノ規則ニテ家内百般ノ事ヲ整理スルコトナリ (中略) 質素儉約ノ義ニノミ用ユルコトアリ」としました。よって「ポリチカル・エコノミー」とは、「國民家ヲ保ツノ法ト云ヘル義ヲ成ス」、つまり、国家における国民の家政法としたのです。“Political Economy” は当時、「経済学」を指す一般的かつ俗語的な用語だったとされています。いわゆる古典派経済学の学校向け教

本の翻訳を通じて、国民的なお金の儲け方を「経済」としたのでしょう。

また、国立国語研究所が提供している全文検索システム『ひまわり』で『明六雑誌』コーパスを検索すると、1874 年 (明治 7 年) 刊第 3 号に津田真道 (1829 - 1903) が寄稿した「開化を進る方法を論ず」と題する小論に、「経済」があります。「實物に徴し實象に質して専確實の理を説く近今西洋の天文格物化學醫學經濟希哲學の如き實學なり。此實學國內一般に流行して各人道理に明達するを眞の文明界と稱すべし」。開化を騒ぎ立てるご時世に、虚学におもねるのではなく、実学重視が眞の文明界だとし、その実学の 하나가「経済」だとした一文です。さらに、同年 (同年) 刊第 13 号に中村正直 (1832 - 91) が寄稿した「西學一斑の續」と題す



【出典】 福澤諭吉著『西洋事情 外編 三 (經濟ノ總論)』
(慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション)

※ — は筆者による

る小論には、「休模（ヒューム）の論ずる如く倍根（ベーコン）邦國の經濟を論ずるは狹隘にして且謬れりと言べし（中略）休模（ヒューム）の説の如き今は國人の公論となりて經濟の大道理と稱許せらるることなり」という一文があります。ベーコンの保護貿易論を批判したヒュームの自由貿易論を、中村は「大道理」と評価しています。両者における「經濟」は、ヨーロッパの学問に関する言及のため、少なくとも単純な「經世済民」とは言えないでしょう。

なお、井上哲次郎（1855－1944）らが1881年（明治14年）に編纂発行した『哲学字彙』では、“Economics”を「家政／理財學」と訳しているほか、“Economical philosophy”を「財理學」、「Political economy」を「理財學」を訳しています。「理財」と「財理」の意味的なちがいは良く分かりませんが、金銭的な富のための哲学が「財理」かもしれません。

いずれにしても、「經濟」という訳

語は、“social economy”や“political economy”に対するものでした。単語としての“economy”の訳語は「家事／儉約」でしたが、アメリカ人宣教師ヘボン（J・C・Hepburn 1815 - 1911）が、「經濟」と訳した例があります。「經世済民」を理解した上で訳したのは定かでなく、“political economy”に近い意味だったと推測されます。

馮氏は、“economy”の中国における同時代の訳出語についても言及しています。それによると、清末の中国では、欧米人による中国語訳と中国学者による訳語とが入り乱れ、統一性はなかったとしています。主な訳語として挙げているのが、「富国策／富国学／計学／生計学／平準学／理財学／財学／資生学／輕重学」などです。「經濟」という訳語は、「經世済民」との混同を避けたい意図から、ほとんど使われなかったとしています。なお、欧米人による中国語訳は、ほぼすべて“political economy”に対するものでした。結果的に「富国」のような国家的視点での訳出になり、“economy”の訳語としては不適切と言えます。また、日本と同様に、一つの学問のような訳語が多いという特徴がありました。

日本でも中国でも、「經濟」という訳語の定着には一定の時間を要した、と馮氏は述べています。日本では、「經濟」を「理財」とする慣行が一定期間あり、財務省の部局名として現在も残っていたりします。中国では、孫文（1866 - 1925）が日本での用例に倣って「經濟」を積極的に使ったことで、「經世済民」を脱した「經濟」が普及したとしています。

Politeism	折衷學派
Economics	家政、理財學
Ecstasy	消魂、奪魄、大悅
Ectype	模型、儀範
Education	教育
Dogmatic philosophy	獨斷哲學
Economical philosophy	財理學
Empirical philosophy	經驗哲學
Policy	政法、權道、術數
Political economy	理財學
Politics	政治學
Polity	國政
Politiation	許允

【出典】井上哲次郎ほか編著『哲学字彙』（国立国語研究所蔵／日本語史研究資料）

※ □は筆者による

「経済」は、20世紀以降の日中両国で、“economy”の翻訳語として一般化しました。その“economy”とは何なのかを探るため、ヨーロッパ史に目を転じてみることにします。

●“economy”の祖語を求めて

英 語の“economy”という単語は、語幹の“eco-”と接尾語の“-nomy”からなる合成語です。主要な意味をなす語幹の“eco-”は、文字通り「エコ」と言って良く、“ecology”に繋がる「生態系／環境系」のようなニュアンスを持っています。その由来は、古代ギリシャ語とするのが一般的ですが、ここでは、インド・ヨーロッパ祖語

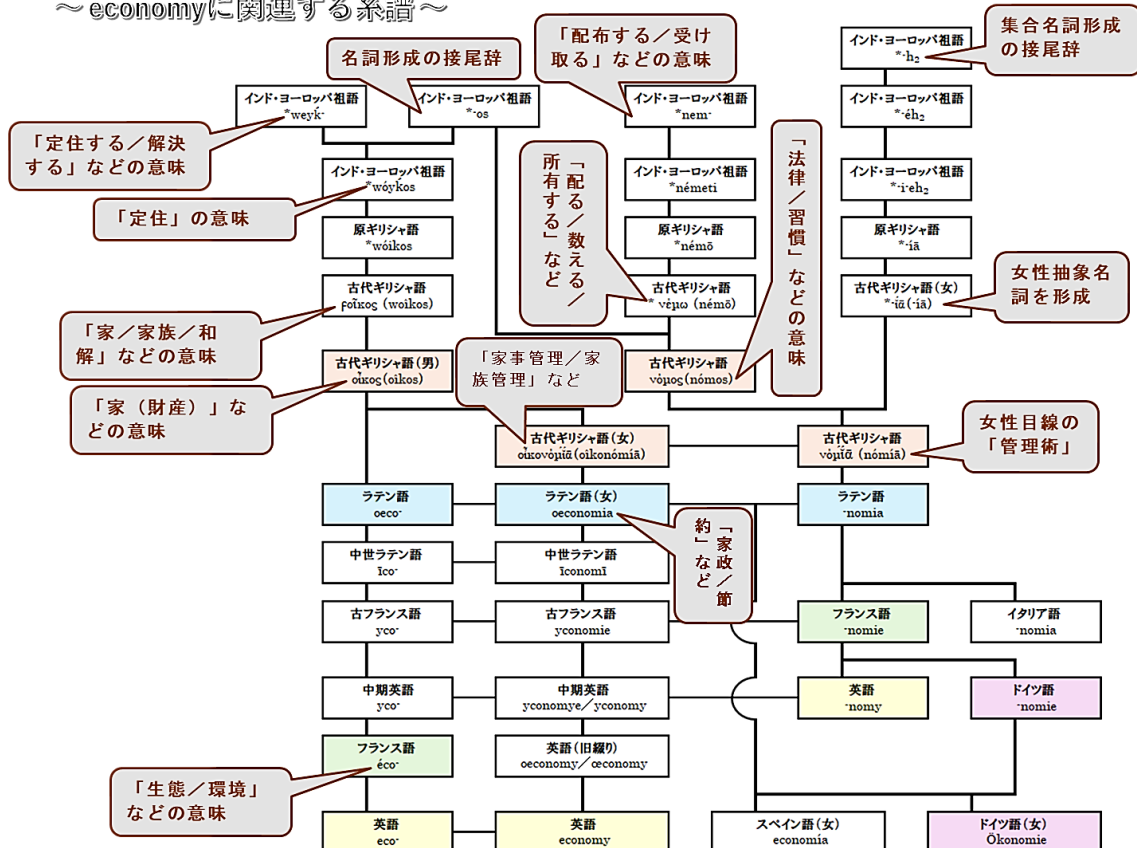
にまで遡って検証してみます。

下図は、“economy”の系譜を概略的に示しています。語幹をなす“eco-”の由来は、インド・ヨーロッパ祖語で「定住する／解決する」のような意味を持つとされる動詞“*weyk-”まで遡ることができます。一方、接尾語をなす“-nomy”の由来は、同祖語で「配布する／受け取る」のような意味を持つとされる動詞“*nem-”まで遡れます。“*nem-”は、英語の“name(名前)”や“number(数)”に繋がった可能性がある語です。

両祖語は、名詞化するなどして古代ギリシャ語に派生すると、「家／家族」を意味する“οἶκος(オイコス)”という男性名詞と「法律／規範」を

用法の系譜ツリー

～economyに関連する系譜～



【出典及び参照】Wiktionaryでの“eco-”及び“-nomy”に関する“Etymology tree”と“economy”に関する各言語の用法解説を参照

<https://en.wiktionary.org/wiki/eco-#English>
<https://en.wiktionary.org/wiki/-nomy#English>
<https://en.wiktionary.org/wiki/economy#English>

意味する“νόμος (ノモス)”という男性名詞を形成したと考えられています。“οἶκος (オイコス)”は、建物としての「家」というより、財産としての「家」のことで、家族や家畜を含みます。一方、“νόμος (ノモス)”は、“φύσις (ピュシス：自然)”の対立概念で、人為的な事柄を指すとされています。人にも「ピュシス (本能)」が備わっていて、それを制御する力を指しました。その“νόμος”は、女性名詞を作る接尾辞“-ῖα (イア)”と接合すると、“νόμῖα (ノミア)”になりました。女性目線で見た「規則」のようなニュアンスの単語です。

その両語は、“οικονομία (オイコノミア)”という合成女性名詞を形成しました。通常は「家政」の訳語が当てられますが、家族構成体の管理運営全般（家計を含む）を指した用語と考えられています。

ちなみに、“*-ῖα”の代わりに形容詞を作る接尾辞“-ικός (イコス)”が接合すると、“οἰκονομικός (オイコノミコス)”となります。「家政の」という意味ですが、ある時期から名詞化して、英語の“economic”になると、“household management (家計管理)”を指すようになりました。

“οικονομία (オイコノミア)”は、ラテン語に派生して“oeconomia (オエノコミア)”という女性名詞になりました。「家政／家計／節約」のような意味を持つとされ、金銭上のやりくりを含む「家」の管理運営全般を指した用語と言えます。欧米語の大半は、この“oeconomia”からの派生語とされ、英語以外の諸言語では女性名詞という位置づけです。各言語

の「経済」以外の訳語を見ると、「節約／儉約」が目立ち、女性が家計を仕切っているイメージなのでしょう。このほか、「構造／秩序」のような訳語もあります。フランス語辞書には“économie du corps humanin (人体の構造)”があり、スペイン語辞書には“economía animal (動物界のおきて)”のような用例があります。

● アリストテレス的な「家政」

古

代ギリシャにおける「オイノコミア (家政)」は、“πόλις (ポリス：都市国家)”と密接な関係にありました。アリストテレス (Aristoteles BC384 - BC322) は、ポリスの善は構成員の善と共にあるとし、「オイコノミア (家政)」の重要性を説きました。市民レベルの善が、ポリス全体の善に繋がるとする考え方で、個々の「家」が平和でないと、ポリスの秩序を乱す要因にもなると考えたのです。

アリストテレスは、「最高善 (幸福)」に至るには、「徳 (アレテー)」が必要とし、それは、超過と不足という二つの悪徳の間にある「中庸 (メソテース)」によって実現するとししました。財貨については、「超過＝浪費」「不足＝ケチ」は共に悪徳で、「中庸」が望ましいとなります。家族体における「オイコノミア (家政)」は、「政治 (ポリティケー)」と同様に両極端に陥らないことを善としたのです。

ケチについてアリストテレスは、「放漫よりもより深く人間の本性に根ざしている」「財貨を愛するたち」「きたない利得を欲する人間」「放漫に比して、より大きい悪徳」などと

しました。「節約／儉約」は、程度問題で悪徳にもなるのです。「しまりや」は、何も与えようとはしないと批判しました。財貨のやりくりを含むその思考法は、ポリス政治を家政レベルに置き換えたものとされています。「超過＝戦争」「不足＝収奪」というポリスレベルでの災厄と同様に、家政レベルでの災厄は、「中庸」で回避されると唱えたのでしょう。

「ノモス（法）」という概念を含む「オイノコミア」は、ローマ帝国時代の「オエノコミア」を経て、中世ヨーロッパのキリスト教社会で活用されて行きました。特に修道院の管理運営で、禁欲的な「節約術」のような意味の用語として使われたとされています。ほぼ「経営」に近い意味と言えます。その意味を援用し、領主などの「家政／家計」やそのやり繰り術を指すようになると、強大化した領主のそれは「王政／王室財政」に変容し、「国政／国家財政」へと拡張した可能性があります。

「家」を持ち、それを維持管理して行くための「ノミア（知恵）」から始まった“economy”は、単なる金銭勘定用語ではなく、家族構成体の「経営（ミクロ経済）」を指したと言えます。“economy class”の“economy”は、「質素な／慎ましい」のように理解するのが妥当なのでしょう。

数千年の歴史を持つ用語は、同じ意味のまま使われて来たとは考えにくい側面があります。歴史的時間の中で、言語間差を含む意味の変容や拡張があったと考えるのが妥当です。それを紐解くには、ヨーロッパにおける貨幣史、中世イタリアやハンザ

諸都市における商業取引、ポルトガルとスペインによる大航海時代の活動、それを凌駕して行くオランダやイギリスの活動、そして、産業革命以降の時代と、歴史的な検証を順次して行く必要があります。いわゆる「マクロ経済」の視点を必要とするようになった時代へのシフトを、用語史レベルから実態史レベルに変えて行く必要があります。その検証は、章をあらためることにします。

●巨視眼と微視眼の「経済」



中語における「経済」と英語における“economy”の意味のズレは、「経世済民」

と“οικονομία（オイコノミア）”のちがいを起源としたものです。「経世済民」が為政者レベルなのに対して、“οικονομία（オイコノミア）”は家レベルの用語です。一方の対象は世の中全般、他方は身内の生活です。上から目線の巨視眼と下から目線の微視眼では、人への眼差しも、不特定多数の「民（people）」と個々の「家族（family）」というちがいになります。良し悪しは別にして、一方は平準的、他方は個別的と言えるのです。

日本語の「経済」は、ある意味では「経世済民」の巨視眼を引きずったまま、「マクロ経済」を指す用語化しました。世の中のお金の動きや景気の浮沈が「経済」で、個人の力が及ばないところで動く社会環境を指すようなイメージです。個人への依存度が高い「家計」は、「経世済民」の巨視眼からすれば、些末なことのように見えてしまうのです。

（2026年10月11日）

【出典及び参考文献】

- ・新村出編『広辞苑 第二版補訂版』（1982年11月、岩波書店）
- ・田中祝夫編『新選古語辞典』（1969年4月、小学館）
- ・岩崎民平／小稲義男監修『新英和中辞典』（1977年、研究社）
- ・福井毅ほか編『ロワイヤル仏和中辞典』（1989年、旺文社）
- ・桑名一博編『西和中辞典』（1997年、小学館）
- ・国松孝二編『独和大辞典』（1990年1月、小学館）
- ・山川堅太郎ほか編『世界史小辞典』（1972年、山川出版社）
- ・歴史学研究会編『世界史年表 第二版』（2001年、岩波書店）
- ・馮天瑜著、呉咏梅訳「中国語、日本語、西洋語間の相互伝播と翻訳のプロセスにおける「経済」という概念の変遷」（2005年10月、国際日本文化研究センター『国際日本文化研究センター紀要 巻31』）<https://nichibun.repo.nii.ac.jp/records/624>
- ・堀達之助編著『英和対訳袖珍辞書 (A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language)』（1862年、立教大学図書館デジタルライブラリ）
https://library.rikkyo.ac.jp/digitallibrary/shuchinjisho/contents/con_01.html
- ・堀達之助編著『英和対訳袖珍辞書 改訂増補版』（1867年、国立国会図書館デジタルコレクション）<https://dl.ndl.go.jp/pid/870101/1/8>
- ・ウィリアム・イリス著、神田孝平訳『経済小學』（1867年、小泉吉永所蔵、国文学研究資料館／国書データベース）
<https://doi.org/10.20730/100299775>
- ・福沢諭吉著『西洋事情 外編三』（1867年、慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション「デジタルで読む福澤諭吉」）
<https://iiif.lib.keio.ac.jp/FKZ/F7-A02-06/pdf/F7-A02-06.pdf>
- ・『明六雑誌』コーパス（全文検索システム『ひまわり』、国立国語研究所）
- ・井上哲次郎ほか編著『哲学字彙』（1881年4月、国立国語研究所蔵／日本語史研究資料）
<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldb/bunken.php?title=tetugakuzii>
- ・Wiktionary「eco-／Etymology tree」からのリンクデータ
<https://en.wiktionary.org/wiki/eco-#English>
- ・Wiktionary「-nomy／Etymology tree」からのリンクデータ
<https://en.wiktionary.org/wiki/-nomy#English>
- ・<https://en.wiktionary.org/wiki/economy#English>
- ・Wiktionary「economic／Etymology tree」からのリンクデータ
<https://en.wiktionary.org/wiki/economic#English>
- ・山脇直司著『ヨーロッパ社会思想史』（1994年2月、東京大学出版会）
- ・アリストテレス著、高田三郎訳『ニコマコス倫理学（上／下）』（1986年8月、岩波文庫）

【注意事項】

本稿のインターネット上でのAI等による要約や語句等を修正した表示について、シンキング・バーズは一切の責任を負いません。ご了承ください。

シンキング・バーズ新書

「経世済民」と“Economy”
～異義語の同義化について～

2026年10月11日（初版）発行

著者：シンキング・バーズ 日本語研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：シンキング・バーズ

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、シンキング・バーズに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。